

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04203

研究課題名(和文) 体育授業における教師の「身体 - 感性 - 言語」の関係に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) a theoretical and empirical study in professional expertise of teaching on teachers' body - awareness - language during physical education classes

研究代表者

厚東 芳樹 (KOTO, YOSHIKI)

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：80515479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：教師の成長には、「運動の知識」獲得が重要であり、優れた教師へと成長するための十分条件になっている。しかしながら、この手の知識獲得に関わった問題認識と関心の形成の前段階に、授業マネジメントなど授業の基礎固めに関わる問題といったステージなどが存在しているものと考えられた。また、今後の課題として、各教師の身体知のレベルに合った問題(抱くべき関心も含む)とは何か、どうすれば問題を認識させることが可能なのか、また認識すべき問題に順序は存在するのか、といった実践課題を導出することができた。

研究成果の概要(英文)：Teachers must acquire knowledge of "movement". Acquisition of this knowledge is a sufficient condition to grow to an excellent teacher. However, acquiring knowledge such as "lesson management" is ahead. Also, (1) what is the practical problem that matches the level of the teacher, (2) how can the teacher make the problem recognized, (3) whether the order exists in the problem to be recognized, We were able to derive practical tasks such as.

研究分野：体育科教育学

キーワード：小学校体育授業 教師 運動の知識 出来事への気づき 言語的相互作用

1. 研究開始当初の背景

一般に、キャリア発達の様相は、一様でない。なぜなら、いろいろな職業があり、いろいろな人間があり、いろいろな環境があるからである。また、「人間」の要因に限定しても、一人ひとりで生き方が様々に異なっている。このような現状の中にあっても、「優れた実践者」は存在している。それ故、「優れた実践者」へと導くキャリア教育は必要である。本研究は、優れた教師がいかにしてプロ意識を獲得してきたのか明らかにしようとするものである。ここには、「同じ経験をして、成長する人とそうでない人がいる」とする現象を教師のキャリア発達の側面から追求してみようとする動機がある。

これまで、誰もしが学習成果の高い教師(以下、優れた教師と称す)になりたいという願いから、優れた教師が有する知識や技術を明らかにしようとする Teaching Expertise 研究がアメリカを中心に押し進められてきた。とりわけ、優れた教師の「技術的实践」に関しては、行動科学の発達に伴って「プロセスプロダクト」研究法を用いた「授業の科学」が飛躍的に進歩し、学習成果を高める指導プログラムや指導技術がある程度まで解明されてきた。その一方で、マサチューセッツ工科大学の Schon (1983) が、「技術的实践」の優れた専門家は「省察 (reflection)」も優れていたことを導出したことは周知の通りである。

この Schon の研究を契機に、国内外を問わず、教師教育界においても「反省的实践」を主軸とする研究が事例的に展開されるようになった。とりわけ、アメリカの Teaching Expertise 研究においては、優れた教師を対象に彼らの省察研究が数多く展開されてきた。それにも関わらず、未だ、山積する学校教育問題(子どもの側では、いじめと不登校、学力の二極化、学級崩壊などが、教師の側では、「不適格教員」の増加がある)の解決が図れないでいる。これまで、わが国の体育科分野の教師教育に関わる研究に限定してみても、教職経験年数の高いベテラン教師であっても学習成果をほとんど高めることができない教師が認められてきた。こうした事実は、物理的な年数を経るだけでは子どもたちへの「言語的相互作用」を適切に展開することができないことを示唆している。

教育言語学者として著名なヒンクス氏(1987)は、運動学習においては教師の課題についての「運動の知識」をクラスの子供達がムーブメントの立場から理解できるように実践的な言葉に翻訳することが重要であり、そこでの教師発言は場の目的と文脈に即していなければならないと主張した。彼の主張からは、体育科では教師が「運動の知識」を獲得すれば、言語的相互作用を展開できる可能

性のあることが推定できる。しかしながら、未だに、「運動の知識」の獲得が言語的相互作用の適切な展開に係るのか検討した研究は皆無である。

他方、筆者は小学校教師 232 名を対象に、教職経験年数という物理的条件が体育授業における学習成果(態度得点、運動技能)に及ぼす影響を検討してきた。また、同教師 42 名を対象に、優れた教師が体育授業を分析する観点やプロ意識の導出、さらには斎藤喜博氏や高田典衛氏など卓越した体育実践者のプロ意識を文献検討より整理してきた。その結果、単なる物理的な経験年数と「出来事の予兆」への気づきの量とはほとんど関係しないこと、優れた教師は取り扱う運動教材で生起するであろう子どものまずい動作や間違った動作に対する手だてを豊富に有していたこと、優れた教師や卓越した体育実践者は「運動の知識」の獲得に日常的に努めなければならないというプロ意識が共通していたこと、をそれぞれ認めた。同時に、初任教師や体育科を専門としない教師の場合、体育授業中の子どものまずい動作や間違った動作に気づけないことを明らかにしてきた。

2. 研究の目的

本研究では、優れた教師は「運動の知識」と「子どものつまずきの類型と対処法に関する知識」を豊富に獲得し、その知識を中核に授業中の「出来事の予兆」に気づき、言語的相互作用を適切に展開できるとする研究仮説を立て、その研究仮説を実際の学校教育現場の授業を対象に実証することで、教師のキャリア発達の一つの方法を開発することを目的とした。

具体的には、以下の3点について検討することとした。

【1】優れた教師は本当に体育授業中の「出来事の予兆」への気づきと言語相互作用とが関係するのか検討するため、小学校教師 6 名を対象に、同一の課題解決的指導法(フラッグフットボール)の体育授業を一単元(8 時間)にわたって実施してもらい、両者の関係を検討した。

【2】優れた教師の「出来事の予兆」への気づきは本当に「運動の知識」より生起するのか検討するため、小学校教師 4 名を対象に、同一の課題解決的指導法(走り幅跳び)の体育授業を行ってもらい、半構造化インタビュー、「ゲーム理論」における「展開型」表現様式の作図、「出来事」調査票からなる三点分析法を用いた質的分析より、「出来事の予兆」への気づきと「運動の知識」との関係を検討した。

【3】優れた教師が有していた知識の伝達可能性を検証するため、体育科を専門としない教師 1 名と初任教師(経験年数 3 年以下) 1 名を対象に、「運動の知識」と「子どものつ

まずきの類型と対処方法に関する知識」を介入することで、教師の「出来事の予兆」への気づきや「言語的相互作用」がどのように改善されるのか、介入・実験的研究を実施した。

3. 研究の方法

研究課題【1】について、小学校教師 6 名を対象に、同一の課題解決的指導法（フラッグフットボール）に基づく体育授業を一単元（8 時間）にわたって実施し、学習成果（態度得点と運動技術）を高めた上位群の教師とそうでない下位群の教師とで、授業中の「言語的相互作用」と「出来事の予兆」への気づきとの関係がどのように異なるのか比較・検討した。教師の言語的相互作用は、わが国の教師行動研究の第一人者である高橋氏が提示した教師行動観察システム（1991）を用いて分析した。具体的には、「肯定的フィードバック」をはじめとした 13 カテゴリーを用いて、教師の全発話内容を意味ごとに分類した。フラッグフットボール教材を選択した理由は、この教材に関わる基礎的研究が数多く蓄積されてきたことにある。これにより、運動実践者の「運動技能」の測定観点を、教師の主観的な評価だけでなく先行研究に基づいて計測・評価することが可能であった。合わせて、単元前後に「態度測定法」を用いた調査を実施した。

研究課題【2】について、教師 4 名を対象に、「運動の知識」を広く有した教師 1 名とそうでない教師 3 名とで、授業中の「出来事の予兆」への気づきがそれぞれどのように異なるのか検討し、結果的に学習成果（態度得点、運動技能）にどのように影響してくるのか検討した。具体的には、走り幅跳びの指導プログラム（全 11 時間）による授業を展開してもらった。走り幅跳び教材を選択した理由については、この教材に関わるバイオメカニクスや臨床スポーツ科学分野の研究が数多く蓄積され、子どもの良い動作とまずい動作・間違った動作の目利きが客観的に可能であるため、教師の「運動の知識」の広さを測定できることにある。教師の「運動の知識」の広さについては、「ゲーム理論」における「展開型」の表現様式と樹形図を用いた調査と半構造化インタビューを中心に測定した。

研究課題【3】について、体育科を専門としない教師 1 名と初任教師（経験年数 3 年以下）1 名を対象に、「運動の知識」と「子どものつまずきの類型と対処方法に関する知識」を介入することで、教師の「出来事の予兆」への気づきがどのように変化し、授業中の「言語的相互作用」がどのように改善されるのか検討した。各調査対象者には、介入前にサッカーもしくは短距離走教材を、介入後の単元としてハンドボール教材を、それぞれ実施してもらった。介入前後の学習成果（態度得点）の測定は、研究課題【1】【2】で行ったものを使用した。また、授業中の「出来事の予兆」への気づきと「言語的相互作用」も

研究課題【1】【2】で行ったものを使用した。知識への介入は、過去のバイオメカニクスや臨床スポーツ科学の分野を中心としたスポーツ諸科学の研究成果を収集・整理したもの、サッカー、短距離走およびハンドボールを専門とする専門家からの専門的知識提供、これらの運動教材を取り扱った過去の先行研究で認められた「子どものつまずきの類型と対処方法」を体系化したもの、さらには学校体育授業辞典の内容をそれぞれ提示した。

4. 研究成果

上述した研究課題【1】【2】【3】より、以下の 7 点の研究成果が得られた。

(1) 学習成果を高めた教師の方がそうでない教師よりも、一授業あたりの「出来事の予兆」への気づきの多いこと、学習成果を高めた教師は子どもの「技術的つまずき」に関わった内容が多いのに対して、そうでない教師は子どもの人間関係に関わった「社会的つまずき」と「心理的つまずき」に関わった内容が多い傾向にあったこと、学習成果を高めた教師は気づいた内容に対してスポーツ諸科学の所見から推論する「合理的推論」を多く記述していたのに対して、そうでない教師は子どもの様子から心情を推論する「心情的推論」を多く記述していたことが、それぞれ確認できた。

(2) 学習成果を高めた教師の方がそうでない教師よりも、「肯定的フィードバック」「矯正のフィードバック」「発問」の 3 つが顕著に多かったのに対して、そうでない教師は「否定的フィードバック」「マネジメント」が多い傾向にあった。また、前者の教師は「出来事」調査票への記述内容と実際の言語的相互作用の内容とが合致していたが、後者の教師は調査票への記述は認められるものの実際には言語的相互作用として発揮されていなかったものも認められ、全体的に言語的相互作用の量が少ない傾向にあった。

(3) 上記(1)(2)より、学習成果を高める教師は、スポーツ諸科学の知見に関わった「運動の知識」を豊富に有する身体形成によって、子どもの運動パフォーマンスの向上を企図した「出来事の予兆」への気づきと言語的相互作用の展開が可能になっているものと考えられた。

(4) 学習成果を高めた教師とそうでない教師とで本当に「運動の知識」の広さが異なるのかを調査した。その結果、記述した樹形図やインタビュー調査の内容より、前者の教師は子どもの良い動作を目利きする観点を豊富に有しており、まずい動作・間違った動作の類型やそれらを改善する具体的な手立てに関わった情報も有していたことがわかった。一方、後者の教師は、良い動作を目利きする観点はほとんど有していないことがわかった。これらより、優れた教師へと成長していくためには、「良い動作とは何か」という「運動の知識」を豊富に有した身体を形成

することが重要であるものと考えられた。

(5) 学習成果を高めた教師への成長過程を文献学的に検討した結果、多様な人との出会いやメンターの存在の教師との出会いなどから、「良い動作とは何か」という「運動の知識」獲得の重要性に関わった問題認識が存在し、これに関わった関心の形成があったこと、この前段階として、授業マネジメントなど授業の基礎固めに関わった問題認識が存在していた可能性の高いこと、といった成長プロセスを経てきたものと推定できた。

(6) 上記(1)～(5)より、総じて「身体-感性-言語」はつながっていること、また教師の「身体」の質によって感性とそこから発揮される言語も異なってくるという研究仮説の妥当性が確かめられた。合わせて、教師が認識している問題によって生起する関心が異なっているものと考えられた。これより、教師の問題認識の相異によって「感性-言語」のあり方も異なるものと考えられた。

(7) 最後に、「運動の知識」への介入によって「運動の知識」獲得の重要性に関わった問題を認識してもらうことで、教師の「出来事の予兆」への気づきがどのように変化し、授業中の「言語的相互作用」がどのように改善されるのか検討した。その結果、子どもの「技術的つまづき」への気づきやスポーツ諸科学の知見から推論する「合理的推論」の量は増加したものの、実際の言語的相互作用が変化することはなかった。また、子どもたちの学習成果が高まることもなかった。

(8) 上記(7)より、「運動の知識」獲得は重要であり、優れた教師へと成長するための十分条件ではあるが、この手の知識獲得に関わった問題認識と関心の形成の前段階に、授業マネジメントなど授業の基礎固めに関わる問題といったステージなどが存在しているものと考えられた。今後、各教師の身体知のレベルに合った問題(抱くべき関心も含む)とは何か、どうすれば問題を認識させることが可能なのか、また認識すべき問題に順序は存在するのか、といった実践課題が残った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

1) Kei KUNIKANE・Yoshiki KOTO・Sumihiro MORISHITA, Study on the Way of “English Education” in the Future, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 査読無, 第130号, 2018, (印刷中).

2) 厚東芳樹, 体育科の授業研究にみる教師の実践的力量に関する一考察-関心をいかに形成するか-, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 査読無, 第128号, 2017, 13-26.

3) 藪下美幸・厚東芳樹・国兼慶, 教師の実践的力量の熟達化に関する文献学的検討

- Sensitivity とは何か -, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 査読無, 第128号, 2017, 27-39.

4) 厚東芳樹・金須一昂・島崎百恵, 体育科模擬授業における大学生の「出来事の予兆」への気づきの検討, 北海道体育学研究, 査読有, 第51巻, 2015, 51-61.

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

厚東 芳樹 (KOTO Yoshiaki)
北海道大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 80515479

(2) 研究分担者

()
研究者番号:

(3) 連携研究者

()
研究者番号:

(4) 研究協力者

()